

## 大好きな一冊の絵本

小さい頃、好きだった一冊の絵本があります。でもその絵本の事は、大人になってすっかり忘れていたのです。幼稚園で先生に読んでもらったのかも、両親が買ってきてくれた本なのかも、まったく忘れていました。

その絵本の事を思い出したのは、あるドラマを見たのがきっかけでした。ドラマの中の主人公が大切にしていた絵本。その主人公はその絵本が大好きで、毎日持ち歩いてはつらい時、悲しい時、その絵本を読んでいます。『ぐるんぱのようちえん』その絵本のタイトルを聞いた時、「昔、よく読んだなあ。」と思いだしたのです。そして、小さい時の様々な思い出が頭をよぎり、懐かしさから、次の日絵本を探しに、本屋へ出かけていました。

その当時、私には二歳と一歳の娘がいたのですが、私とその絵本を見てみると、上の娘が私の所にやってきて、娘にはまだちよつと難しい絵本を横からのぞきながら、わかっているのかいないのか、熱心にその絵本を見ていました。今までにも、たくさん絵本を読んでいたのに、あまり興味を示さず、本をおもちや代わりに遊ぶ事が多かった娘が、意外にも強い興味を示したのです。それからというもの、この絵本をきっかけに、娘は絵本のおもしろさを知り、絵本を読む時間が増えていきました。ある時はママが娘をひざの上に抱いて絵本を読み、パパは二人の娘を両側に、布団の上に寝転がって読んだり、絵本を読む短い時間ですが、おしゃべりをしたり、親子の大切なふれあいの時間が持てるようになりました。

今でも、我が家では、この一冊の絵本が大好きです。姉妹で

取り合うので、やぶけてボロボロですが、テープで補修し、大切にしています。絵本を見る所から始まり、両親に読み聞かせてもらった時期があり、今では二人の娘も、自分たちで読めるようになりました。たった一冊の絵本から、様々な思い出がふれてきます。ママの大好きな一冊の絵本が、今では、家族皆の大好きな絵本、とても大切な絵本になりました。

野ばら幼稚園(石橋町)保護者 Iさん

## 絵本のマジック 父として、幼稚園教諭として

「絵本の読み聞かせ」というと、母親、あるいは女性がやるものというイメージがまだ強いかもしれません。でも、育児や保育に不器用な父親、男性にこそ、「絵本」という、手軽でリーズナブルな子どもとのコミュニケーションツールがあることに、もっと気付いてほしいと思います。

私は今でこそ二歳の男の子の父親で、幼稚園で教諭として仕事をしていますので、「絵本の読み聞かせ」は、毎日の日課になっています。しかし、以前はやはり、「忙しくて...」「なんか照れくさい。」といった理由でそれほど絵本に興味を持てませんでした。

幼稚園で最初の担任を持ったときも、たまに紙芝居を読むことはあっても、あまり絵本を手取ることもなく、まずは子ども

もたちと外で遊ぶことばかりに躍起になっていました。しかし、二学期が始まると、運動会を始めとする様々な行事の準備に追われ、なかなか子どもたちとゆっくり遊んであげられない日々が続いてしまいました。そこで、場所を選ばず短い時間でも子どもたちとコミュニケーションがとれるものは何かないかと考えていたある日、何気なく手に取った絵本を読み始めたところ、予想以上に子どもたちは、目を輝かせてじっと聞いています。ありませんか！読み進める間も、気になる場面があると、どんな私に話しかけてきます。読み終わると、子どもたち自身が本棚から好みの絵本を選んで、「次これ読んでー！」と言ってくるようになります。それ以降は、帰りのバスやお迎えを待つちょっとした時間に読み聞かせたり、子どもたちの集中力を高めるために様々な活動の前に読むようにしました。一本調子だった私の保育も、そこから少しずつ柔軟なものになっていった気がします。

この文章を読んでくださっている方のなかで、「最近子どもと接する時間がないなあ」とか、「よく子どものことがわからない」といったお父さんがいらつしやいましたら、ぜひ子どもと一緒に絵本を読んでみることをお勧めします。きつと「こんなことに興味を持つようになったんだ」とか、「面白い考えかたするなあ」とか、普段気付かない我が子の成長ぶりを目の当たりにするでしょう。子育てを母親にまかせてしまったり、子どもにテレビやビデオを見せておくことは簡単ですが、少しの手間で子どもと貴重な時を共有できる、絵本の読み聞かせという「子育てマジック」を使わない手はありません。父親ならではの絵本のセレクトや読み方も、子どもの感性を豊かなものにする助けになるかもしれません。

そういうわけで、息子が生まれた時も早くから絵本をおもち

や代わりに与えたり読み聞かせたりしていました。もちろん内容がよく解らないでしょうが、きれいな色や形、読んでくれる親の声や表情、そういったものを乳児なりに感じることは大切なことだと思えます。今では、母親に読んでもらおうとすぐ、そばにいる私に、その同じ本を読んでほしいと差し出してきます。もちろん最初から読んであげるのですが、これは、絵本を読んでもらう時間が子どもにとって、内容を楽しむ以上に、「この人に自分は愛されている」と感じられる心地よい時間であるからなのでしょう。

今、私にとって「絵本」は、子どもと心を通わせる手段として、かけがえのないものになっていきます。家や保育室に並ぶ少しくたびれた絵本たちは、破れたり落書きがあつたりジューズの染みが付いたりはしていますが、子どもと豊かな時間を楽しみ、ともに成長してきた思い出の記録であり、宝物でもありません。

「先生（パパ）これ読んでー！」保育室で、家で、今日もそんな子どもの一言を密かに待っている自分がいます。

御幸幼稚園（宇都宮市）教諭 Kさん



## 「おやすみなさい」の前に

我が家では、「今日はもう寝よう」と言っても聞かない二人の子どもに「本を読むから選んで！」と言います。すると、すっと立ち上がり本棚の前でお気に入りを選び、すぐに寝床に直行します。そんな子どもたちの姿を見ると、自分で本を読む事が出来るようになって、読んでもらうという事は、やはりとても嬉しい事なのだつくづく感じます。また、毎日慌ただしく、子どもと真剣に接する時間がなかなか取れない私にとっても、寝る前に本と子どもとともに過ごす、穏やかなひとときは何ものにも代えがたい大切な時間です。

今は主に絵本を読み聞かせしています。字のない絵本にその都度話をつけて読んだり、時には図書館で借りた紙芝居だったりしますが、絵本の殆どは子どもに選ばせています。楽しいのに奥が深いもの、絵の美しいもの、自然や科学などの絵本を通して親子ともに感動したり学んだり、安らいだり、気持ちを共有する素晴らしい実感しています。

これからも子どもたちが、そして私も穏やかな気持ちで「おやすみなさい」を言えるよう、寝床で体と心をふれあいながらの読み聞かせは続けたいと思います。

公立保育所 保護者

## 思いが自分を変えるということ

長男が小学一年の頃、友達の影響もあって、悩んだ末に、小型のゲームを買いました。しかし、買って与えておきながらも、子どもがゲームをやっていると、怒っている私がいるのです。やはり親として、私が望む子どもの姿ではないのだと思い至り、意を決し、子どもがゲーム機を置き忘れたものを私のタンスにしまい込みました。思いきって、テレビも押し入れにしまいました。

なんと生活が清々として、心に平安がもどったような気がしてきました。それから、週に一度、まちの図書館に通い絵本を数十冊借りてくるのが習慣になりました。まだ、字の読めなかった二人の弟も、自分たちでよく電車の本を借りるようになりました。一歳の子どもがじつと本に見入って、本をめくっている姿は、驚きと同時にうれしくもありました。

今でも六歳と二歳の弟たちに絵本を読んで聞かせていると、小学六年になった長男も寄ってきて、じつと聞き入っていることがあります。また私にかわって弟たちに本を読んでくれることも多くなりました。子どもたちが成長していく様々な場面で、私も学ぶことが多くなりました。

主婦 Tさん



## 娘の成長を支えたもの

今年中学二年生になる長女が、鹿沼市の図書館ボランティア「カリブジュニア」をやってみたくて、と言い出したのは、今年の夏でした。今まで社会体験的な活動には全く手を出さずとなかった、どちらかというと内気な娘でした。それが、夏休みを利用して、磯山神社で行われた素話の会に出席したり、他校のカリブジュニアの生徒との交流会に出たりと、積極的に参加しているのです。

そんな姿を見ると、周囲の人は、「さすがお母さんに似て本が好きなのね。」と言います。私自身の職業が教員で、しかも国語科。周りは母親の影響と見るのでしょうか。実は娘の大好きな陰には、育ててくれた祖母と一昨年亡くなった曾祖母の力があるのです。

一歳になったその日から、娘を育ててくれたのは、主人の母。いつも忙しい農家の仕事をこなしながら、一緒に風呂に入る孫に、いろいろな昔話を語って聞かせてくれました。

そして、いつも一番近くにいて、見守っていてくれたのは亡き曾祖母（主人の祖母）です。明治生まれの気骨を持った人で、よちよち歩きのひ孫の面倒をいつも見てくれました。娘がせがむと、いつもひざの間に座らせ、たつぷりと包み込むように両手に抱えて絵本を読んでもくれました。そのひざの上で、いつも娘は何回も何回も絵本を読んでもらっては、幸せそうに本の世界にひたっていたものでした。

いつの間にか、娘は本の大好きな中学生に成長しました。本の読み聞かせは親のもの、と考えるのが一般的かもしれませんが、でも、二人の祖母の力で、本とのふれあい、心の温もりを知っ

たからこそ、娘の成長があつたように思います。

十月には、市立図書館でのお話会に参加する、と言って、今素話の練習中です。祖母たちに育ててもらった本とのふれあいの芽を、今自分なりに育てているようです。この頃では、おすすめの本を尋ねてきたり、逆に、「今読んでる本、おもしろいよ。読む？」とすすめられたりすることもあります。

家族が支え、育ててくれた娘の成長。これからは、本を携えながら自分の足で歩いて行くのでしょうか。

鹿沼市 Hさん

## 子どもの本を選ぶ楽しみ

子どもが生まれ、何か世間並みのことをしてあげられないだろうかとあれこれ考え、私もいつのまにか絵本を買うようになりました。子どもの本だから、どんな本を選んでほしいかわからないだろうと、始めはたかをくくっていました。しかし、これがやってみるとけっこう難しいのです。子どもはとも正直で、興味がわかない本、つまらない本だと二度と自分から開きません。私の家にも、そんな子どもにかえりみられない悲しい本が何冊もあります。それが、おもしろくて楽しい絵本だと、何度もその本を持つてくるのです。おかげで文章を暗記してしまふ程です。でも、「パパ、もう一度読んで。」と言われると

何ともいえないうれしい気持ちになるから不思議です。

子どもが歩けるようになってからは、いっしょに町の図書館や本屋さんに行き、時々行くことが習慣になりました。こういう時の子どもの顔は、普段見ることができない表情になります。あつちへいったり、かくれんぼしたり。「今日はどんな本を選ぶのだろう。」子どもは意外な本を持ってきます。子どもがいつものまにか予想以上の成長を遂げており、びっくりさせられることがあります。ああ、今こういうことに興味があるんだと気づかされることもあります。

最近、私は仕事。子どもは宿題や習い事、そしてゲーム。あわただしい毎日を過ごしています。でも、本を読むときは、「どう思う。」と聞いたり、「パパは？」と聞かれたり、いっしょにその本の話を変えちゃったり、続きを考えたり、そのまま寝てしまったり、ふわふわとした優しい空気に包まれます。

子どもが何歳まで、「パパ本読んで。」「本屋さんに行こう。」と言ってくれるかわかりませんが、言ってくれているうちは、いっしょに本を読んでいきたいと思っています。本を読むこと、本を選ぶことは、いつのまにか子どもだけでなく、私と子どもをつなぐ私自身の楽しみにもなっていたようです。



河内町 男性

## 本のある暮らし

数年前職場の上司から「やはり君にとって読書は必要か？」と問われたことがある。とっさに「読書のない人生を歩いたことがないので何ともいえません。」と答えた。読書が必要だと思っていたことなどなかった。虚を突かれた感じだった。確かに読書などなくても生きていけるような気もした。しかし、子どもの時から、誕生日のプレゼントも父親の出張のお土産も本だった私は、プレゼントとは本だとばかり思っていた。毎夜、ソファで本を読む父に「おやすみなさい」を言って床に就く日常が当たり前であった。時にやさしく問いかけ、時に背伸びを強いられる本に様々な影響を受けながら多感な時代を過ごした。

結婚や出産は、その都度人生の転機となり、悩み多き問いかけの六割を本に助けられた。子宝とはよく言うが、二人の子どもに恵まれ、育児の楽しさと母親としての醍醐味を十分に味わわせてもらった。子どもたちが物心ついてからは、毎夜読み聞かせをして寝付かせるのが日課となった。日中一緒にいられない後ろめたさもあり、「もっと読んで…」とせがむ声に「もうおしまい」と言えずに、睡魔と闘いながら読んでやった。子どもたちは本の中から豊かな表現力を吸収していった。気に入った表現は生活のあらゆる場面で活躍した。最初は模倣だったものがいつか身に付いたものになった。悲しくて切ない気持ちを二、三歳の息子が「胸のこの辺（胸を両手で押さえ）がチクチクして痛いくらいかわいそうで、僕苦しいよ…」と言ったり、「ご飯が美味しくてホッペが落ちちゃうよ。」と言っただけのよべたをタオルで押さえてきたり、眼を閉じれば昨日のこのよ

うに数々の思い出の場面が浮かぶ。心の成長とともに、その育ち行く心の内を豊かな表現力で母親に伝えようとしてくれた。子どもたちに与える本を選ぶのも楽しかった。読後の感想を語り合うことで共通の話題に事欠くこともなかった。年を経るごとに「命」や「生きがい」についてなど、深いテーマを語り合うことができるようになった。心の成長を確かめながら、話し相手として頼もしくなりつつあることに不思議な感動を覚えた。

いつしか長女は十八歳、長男は十三歳。子どもたちが「この本いいよ。」と薦めてくれるようになった。長女は絵本作家を夢見て、この春、美術大学の洋画科に進んだ。彼女は「言葉の力と絵の力が、子どもにどんな感動を与えるのかを身をもって体験してきた自分にできることはこれしかない。」と言い切つて進路を定めた。十八歳の頃の不確かな自分とは比べものにならないほど娘が立派に見えた瞬間であった。

自分の親以上の環境を、子どもたちに与えられるかどうか不安に思いながら親になってしまった私である。しかし、今、十八年を振り返れば、子どもたちと私の間には三人で絵本や本を読んで、同じ感動を共有してきた歴史が残った。更に自分の人生の折り返し地点に立つてみれば、傍らにはいつでも本があった。

あの時の上司に今ならばつきりと答えられるかもしれない。「やはり、人生に読書は必要です。」と。

高等学校講師

## 一冊の絵本を通して

私には四人の子どもたちがいる。同じ家庭環境で育ったはずなのに、不思議に皆それぞれ異なった性格をしている。しかし、ただ一つ共通に持っているものが彼らにはある。それは、本好きであるということだ。私は、子どもたちに早く文字を覚えてもらいたくて幼い時から意味がわからなくても毎日のように絵本を読み聞かせていた。子どもたちの生活の中に絵本を見たり聞いたりすることが食事をするのと同じになつていった。だからといってテレビを見せなかつたり漫画を読ませなかつたりするようなことはなく、彼らが自然と自分で興味を持つものをそのまま与えていくというやり方であった。その頃には文字を覚えさせるといふ「教育」を忘れ、私もともに絵本を楽しむことが日課のようになっていた。子どもたちが成長するにつれて興味を持つようなものを制御しつつ、親の選んだ良書だけを読ませるといふのも一つの教育かもしれないが、私も夫も子どもたちの自然な興味の持ち方に任せた。それがよかつたか今でも結論が出ないが、子どもたちが成長にあわせて自然に本を選ぶ姿、育つていく姿を親として間近にみることでできたのは事実でありうれしくもあつた。子どもたちが幼い時、絵本を読んでいくうちに、聞き手の子どもも読み手の親自身も夢中になつていくのが分かる。子どもと親が一緒になつて驚いたり喜んだり悲しんだりしながら、物語の世界を共同体験していくといった感じだ。親が読んだ所を繰り返したり、登場人物の言葉を子どもが読み手の親より先に言ったりして、子どもは次第に絵本の世界へ入り込んでいく。現実とは別の少し怖い世界へでも、子どもは親の肉声を聞き、息づかいを感じながら、安心して飛び込ん



でいけるのだと思う。

長女が幼稚園に通っている時に配られた月刊絵本に、『めつきらもつきらどおんどん』（長谷川楨子作）という絵本があった。この絵本は長女だけでなく、四人の子どもが全員夢中になって読んだ絵本である。神社の御神木の前で、『めつきらもつきらどおんどん。』と言うと、闇の世界に吸い込まれて、三匹の妖怪と遊ぶという話である。絵本だからこそ、その面白さが發揮される内容であり、絵と文字が縦になったり、横になったり、時には逆さまにまでなつて妖怪と子どもがぐるぐると遊び回るのである。長女は、覚えてしまった絵本の語りを大きな声で私に読み聞かせようとす。次女は面白いページになると、一所懸命に指で「これ、これ。」と示しながら私に訴える。三人目の長男は、私に体を寄せて絵本を見ながらじつと私の話を聞いている。そして、成長した長女が親の代わりに絵本を四番目の次男に読み聞かせ、その次男がにこにこしながら絵本を話に合わせてぐるぐる回して遊んでいる。合い言葉のように声を合わせる様子が我が家で流行つた。

現在、長女は大学を卒業し、舞踊と表現の研究生としてまだ修業中。次女は大学四年生で比較文化論の勉強中。高校生の長男は我が家には珍しく理系。その読書分野は広く、私の知らない情報をもらうこともある。次男は何でもかんでも興味を示す行動派の中学生。皆それぞれやりたいことをやりたいようにやっている。子どもたちは四人ともそれぞれの心の中に幼い時に親と共有した絵本という豊かな世界を持っている。無理して親子が向き合うのではなく、自然に親子が同じ方向を向いて、同じ気持ちになるということが大切なのではないかと最近思うようになってきた。今私の目の前の本棚に忘れられたように置かれた『めつきらもつきらどおんどん』の絵本が、次の世代の子

どもたちと早く一緒に遊びたがっているように見えるのは、親の勝手な想像だろうか。

高等学校講師 Sさん

### 子どもたちといつしよに楽しんで

「しゃくだ！しゃくだ！」と、声をはりあげ子どもたちの表情をそつとうかがうと、「どうしよう」と困った顔をしている。

やえもんが怒るのも無理もないし、でも格好よくないし、かわかれても仕方がないような気もすると、戸惑っているようです。

図書館ボランティアの一環で始めた読み聞かせは、気のあつた仲間とともに始めました。講習会を開いて、一通りのノウハウは身につけたものの、やはり頼りになるのは自分の子育ての体験、我が子の子どもの時代を思い出して「お話し会」を始めました。

お話し会は、まず本選びから始まります。子どもの本を選ぶのはとても楽しいものです。鮮やかな色彩、大げさな表現、懐かしい風景。登場人物、動物、物のことばや声。全てに作り手のメッセージ、子どもへのメッセージが込められているようです。

お話し会の前夜、子どもたちの反応を想像して、私はいろいろ

るな読み方を試してみます。

読み聞かせを計画したころには、「きちんと聞いてくれるかな？」と心配したのですが、子どもたちの反応のすばらしさに、よけいな力が入ってしまったりして、「感情をあまり出してはいけない」と、途中で反省することもあります。

でも、実際、会場で本を開くと、練習をした成果は、あらわれません。なぜなら、お話し会のもりあがりには、読み手の私だけが作るのではなく、聞き手の子どもたちと一緒に作るものだから。

子どもの表情、しぐさを見ながら私の読み方も変わります。まだ小さな聴衆には、書き手のメッセージを伝えるということよりも、本の世界の入り口に手をかけるきっかけを作ることが大切なのかもしれません。

会場の子どもの全身が、私の声や言葉に向くように、そのために一冊の本と一緒に楽しむ。

お話し会は「読んであげる」のではなく、「楽しむ」ものなのだ、私は思います。

三十年以上も前、子どもたちだけのために読んでいた絵本を、私は今、子どもと楽しむために読んでいます。

このお話し会が、未来の彼らの豊かな世界への入り口になることを願いながら。

図書館ボランティア「ピノキオ」 Sさん

## 読み聞かせを通して得たもの

安塚小学校で「朝の読み聞かせボランティア」の募集をしたのは平成十二年の九月でした。

その時息子は三年生。学校から帰宅して一番始めにすることはゲーム、愛読書は攻略本という日々を過ごしていました。他人の事には関心を持たない我家の子どもたちに、「人を思いやる心」「自分は他人のために何が出来るか」を、考えて欲しい。わかって欲しいという願いを込めて、小学校でボランティアをすることを決めました。

何の特技も持たない私にできることといえば、本の読み聞かせぐらいかな、なんて気軽な気持ちで参加してしまいましたが、いざ活動を始めてみると難しいことばかり。安易な気持ちで始めてしまったことを後悔することも度々ありました。

安塚小学校での読み聞かせは平成十二年の二学期から始まり、初年度は教養委員を中心にボランティア数名で行われましたが、平成十三年からはボランティアのみの活動となりました。読み聞かせの進め方や本選びの難しさなど様々な問題に直面して、私たちは月に一度定例会を開き練習や反省点を話し合いながら、手探りの状態で活動を続けていきました。

そんな私たちにアドバイスや励ましの言葉を掛けてくださる先生方、真剣にお話を聞いてくれる子どもたち、その子どもたちの笑顔が私たちに勇気を与えてくれました。

安塚小学校では毎年十一月に児童が感謝の会を開いて、普段お世話になっていらっしゃる方々をお招きしています。私たちのグループも招待されて児童から感謝の言葉とメッセージ、それからお花もプレゼントして貰いました。メッセージにはかわいいうらスタもあり、この様な言葉が書いてありました。「いろいろな読み聞かせをしてくれてありがとうございます。そのおかげで、



わたしは読み聞かせが大すきになりました。わたしは、大きくなったら読み聞かせをしたいです。」二年生の女の子からのメッセージでした。私たちの活動が少しでも役に立ち、本の好きな子がひとりでも多く増えてくれればこんなに嬉しいことはありません。

息子にも少しずつ変化が出てきました。朝の読書の時間に、友達が、『ハリーポッターと賢者の石』を読んでいる姿を見て興味をわいたようです。今まであまり本を読まない子だったので、真剣に本を読んでいる姿にちよっぴり感激しました。高校生の娘も小学生の頃に読んだ本や、私が選んだ本の内容を見てアドバイスしてくれたり、読み聞かせを通してうちの子どもたちとの会話がなくなったことも嬉しいことのひとつです。

読み聞かせをして得たものは私の人生観を良い意味で変えてくれました。私にとって本は物語の世界を楽しませてくれるだけではなく、一緒に活動してくれる仲間、今まで話をする機会の少なかった先生方、そして元気な声で挨拶してくれる安塚小学校の子どもたちなど、大勢の人たちとの出会いをもたらししてくれました。これからもこれらの人たちと過ごす時間を大切にしていきたいと思います。

壬生町立安塚小学校

読み聞かせボランティア「ゆめのページ」 Kさん

## 私と読み聞かせボランティア

私が読み聞かせボランティアを始めたきっかけは、息子の通う小学校で、新たな試みとして「朝の学習」の時間に、保護者による「読み聞かせ」をと、校長先生が募ったボランティアに参加したことです。

家では時々、夜眠る前にお布団の中で、絵本を読んであげることがありましたが、「読み聞かせ」に関する知識は全くありませんでした。本の持ち方や、ページのめくり方、わからないことがたくさんありましたが、活動をしていく中で、他のお母さま方と情報交換をしたり、研修会に参加させて頂ける機会もたくさんありました。でも、何といても「生」で子どもたちと接することが一番勉強になりました。

「読み聞かせ」の日を楽しみにしている子どもたちの笑顔、お話を真剣な眼差しで聞いている顔、時には大きな声で笑ったり、涙ぐんでしまったり、子どもたちは様々な表情を私に見せてくれます。

「明日はどんな本を読もうかなあ」と考えているとワクワクしてきます。

朝、教室の前で待っていると、子どもたちは次々に私のまわりを集まって、

「おはよ。今日は何のお話？」

「いっぱい読んでネ！」

と声を掛けてくれます。お話が終わると、

「おばちゃん。明日も来てね！」（月に二回なので、本当は明日はないんです…）

そんな時が、「読み聞かせ」をしていてよかったなあと思う瞬間です。

我が子のためにと始まった「読み聞かせ」も今年で四年になりました。今では私の楽しみのひとつとなり、他の小学校や老

人福祉施設でも活動させていただいています。少々体調が悪くても、「みんなの笑顔が見たい」「楽しみに待っていてくれる」と思うと、「よぉくし！頑張るぞ！」と力が湧いてきて、帰りはすっかり元気いっぱいになっています。

これからも絵本を通して、たくさんの人と出会い、交流が持てたらよいなあと思います。

読み聞かせボランティア「ローズマリー」 Nさん

## 読書への誘い<sup>いざな</sup>を期待して

起立、礼、生徒たちの好奇心に満ちた瞳が、私の心をかきたてる。僅か朝の十分間の読書の時間に、月一回、社会人ボランティアとして、中学生にブックトークを五か月間実践して来た。古典あり、名作あり、童話あり、詩あり、紹介するジャンルはさまざまである。日常接している教師とは異なり、面識のない社会人ボランティアが語るさまざまな本の紹介は、好奇心も手伝って、よく耳を傾け、目を輝かせ聞いてくれる生徒が多い。

矢板中学校は、朝の読書の時間を日課に取り入れて十五余年になる。ともすると朝のスタートが生徒たちの不揃いで、落ち着かなくなりがちであるが、さすが朝の読書の歴史が重ねられ、ブックトークに教室に出向くと、生徒たちは着席して待つ態度が大変よい。

本を紹介する時間は十分間なので、いかに効果的に無駄なく印象的に興味をそるような内容紹介にするかが課題である。かなり自分で予習をし準備をして、語り口調をも工夫しなければならぬ。私の紹介した本が、クラスの生徒の中で何人読んでもくれるかが一番の関心事である。

十分間という短い時間の中では、本の本筋や興味をそるところまで紹介することは、なかなか難しい。そこで、学校図書館や市立図書館等の身近かにある本で、是非青少年に読んで欲しい本や、私が少女時代に出会った感動を覚えた本、国語の教材と関係ある本等を選択し、ブックトークの対象として選択している。紹介した本が身近にあることによって、読んでみようと思っ掛けになり、発展的に読んでくれることを願って臨んでいる。

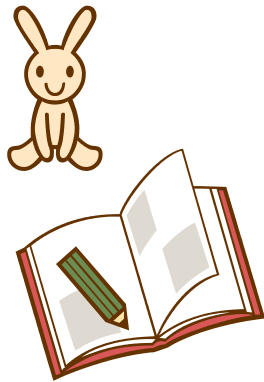
今までにブックトークボランティアとして成功したなと思われる例は、学校図書館の蔵書を見せていただき、更に当該学年の国語の教科書教材に目を通し、国語の学習の予習となるように、集団読書の作品（教科書教材と同じ作品、同じ作者の作品）を紹介した時のことである。ストーリーのクライマックスのところまで時間切れになってしまった。話の展開はこれからどうなるか期待の持たれるところで、紹介は終わらざるを得なくなり、この後のストーリーの展開はどうなるのか、今日紹介した集団読書テキストが学校図書館の文学ジャンルの棚に四十冊あることを告げた。そして、是非この残りを読むよう課題としてクイズ式で与えてみた。ストーリーの展開が生か死か、切迫した場面であり、手近に本があったことと、読む意欲づけにクイズ形式で課題を投げかけたことが功を奏し、次の休み時間には、その作品の続きを求めて二十数人の生徒が図書室を訪れて読み通したということである。

作品が短篇であったことと、生徒に課題を与え、解けた人は私宛てに短い解答を寄せるようにしてあったので、効果的であったのだと思う。正解者には、文庫本が買える程度の図書券を贈って賞賛し激励してあげた。興味関心を持つ場面で本の紹介を終わりと、続きは自分で読み終わすよう奨励することが、時間の都合上多くなる。その場合は、読む本が身近にあることが大切な条件になる。

思春期や青年期に、心に残る作品に出会いそれがいかなるジャンルであつても、多かれ少なかれ人格形成の糧になつて行つて欲しいと願いつつ、月一回の生徒との出会いでしかないが、瞳の輝き、態度の凛々しさ、若いエネルギーの響き合いに魅せられて、五年間もブックトークボランティアに参加させていた。生徒の前に立つには、自分なりに研修し本に精通していなければならぬ。自己研修のよい機会であつた。何よりも中学生の若さ溢れる姿に接し、たくさんのエネルギーを与えていただいた。

出会つた中学生の何人でもよい。私のブックトークが心のどこかで響いて、残照になつてくれればよいと願つてゐる。

矢板市 Kさん



やっぱり子どもたちは、本が好き

学校などで、絵本の読み聞かせを実践していると、思つても

みない出会いがあります。小学一年生のクラスでお話をしたときの事です。最後の絵本が読み終わり本を閉じて机の上に置きました。すると後ろの席に座っていた男の子が、とことこと前に出てきたのです。どうしたのかなと思つてみると、机の上に置いてある絵本の表紙に描かれている絵を両手で一生懸命引つ張りながら、「のびるかしら」のびるかしらって女のことはだ。きつと髪の毛が長いはずだ」と言います。表紙の絵には主人公の男の子の顔が描かれており、その短い髪を引つ張つていたのです。「のびるかしら」をわゴムではなく髪のことだと思つたんですね。（絵本の題名『わゴムはどのくらいのびるかしら』ぼるぶ出版）

今まで当たり前に読んでいた本の題名にも、聞き手には自分なりの「はてなマーク」があつたんだとはじめて知りました。「なぜ」「どうして」と不思議に思つたらすぐに行動に移す子どもの感性つてすごいなあと驚きました。

子どもたちが本を読まなくなつたと言われていますが、実践を続けていて感じたことがあります。読みたいのだけれど、読む力が弱くなつて、読み続けることが苦手になつてきているように思いました。ですから、読んでもらう「耳からの読書」は、楽しい時間でもあるのです。「聞く」ということは、自分で一冊の本を読むという読書の入り口であり、聞く読書でもあるんだとつくづく思いました。

読み聞かせが終わつた後、「本って面白いね。」と声をかけてくれた子どもたちが、後日この本を読んだら面白かつたと言つてくれた時、読書の入り口が大きくなつたなとエールを送りたい気分になります。

「私、本を読むのが好きなので……、読み聞かせのボランティアになりたいんです。」中学一年生の女の子からの突然の電話

でした。小学生の時に学校で読んでもらったのがとても楽しかったから、自分も、ほかの人に読んでやりたいと思ったそうです。とてもうれしい電話でした。学校などでの読み聞かせは、読み手が一人で聞き手が多数ですから集団での反応はつかめども、個人の反応はつかみづらいものです。とくに高学年になるとなおさらです。ですから楽しく聞いてくれたんだと知ってうれしくなりました。

実践を続けていると、聞き手の子どもたちからいろんなエネルギーをもらいます。一冊の本が聞き手の子どもたちのこころの琴線にふれたと知った時は、読み手冥利に尽きます。

読み聞かせボランティア

「母と子で絵本を楽しく読む会」 Iさん

## 感性豊かな子に

私の子どもを通う小学校から依頼を受けて、九人の二年生の前で読み聞かせをさせて頂きました。週一回で約二か月間は、私にとってとても楽しい時間でした。私はもともと絵本が好きで、自分の子どもにも読み聞かせをしていました。特に動物が主人公の作品は、子どもが好きという事もあり、家に何冊もありましたので、その中から選んで読みました。

読み聞かせ当日は、毎回わくわくどきどきで、子どもたちはちゃんと聞いてくれるかな、つまらない顔をされたらどうしよう、と思いつながら、教室に入りました。最初はザワザワとして落ち着かないのですが、読み始めると、十八の瞳が一斉に本に集中し、最後迄、よく聞いてくれました。より興味を示してくれる様、登場人物になつたつもりで読みました。

やはり、動物の作品は人気があり、その中でも一番人気は、『うみべのハリー』という犬のお話でした。ホットドック屋さん

が、「いらはい！いらはい！いらはい！」

と、言っているのを、

「ハリー！ハリー！ハリー！」

と、自分の事を呼んでいると、勘違いして、うれしくて、

「わんわん！」

と吠えるシーンを本物さながらの鳴き声で、読んだところ、大うけし、笑いをとった時は、

「やった！」

と心の中で叫びました。子どもたちは最後迄、瞳をキラキラさせて、物語に聞き入ってくれました。読み聞かせ最後の日は、

九人全員が、残念そうな顔をして、  
「もう終わりなの？」

と、言ってくれました。一人一人から感謝の手紙をもらい、とてもうれしかったです。また機会がありましたら、是非、読み聞かせをやらせて頂きたいと思いました。

近年、子どもたちの間では、ファミコンゲームなどが主流となり、キレやすい子が増えていると聞きます。読み聞かせを通して、子どもと触れ合い、想像性や独創性など、感性豊かに育つてくれればいいなと思いました。そして私自身も、絵本に限らず、様々なジャンルの本を読んでいきたいです。

主婦 Sさん

### 子どもとふれあえる喜び

私が読み聞かせたボランテアを始めて一番最初に選んだ本は、私が子どもの頃に夢中になって読んでいた絵本でした。現在中学生の長女が生まれた時に、いつか役に立つだろうと実家から持ち帰ったものが、四歳下の長男が小学校三年生になって、ようやく日の目を見たのです。

子どもとはいえ、多勢の人の前で本を読むという事に不安がありました。目をキラキラさせて絵本に集中してくれる子どもたちを見たら、なんだか嬉しくなり、とてもやりがいのある活動だなあと思える様になりました。

私は年に数回しか読み聞かせに行かないのですが、それでも  
「君のお母さん」と顔を覚えてくれて、

「今日はどんな本を読むの？」  
「今日は何冊読んでくれるの？」  
と声をかけてくれると、ボランテアをやったよかったです。心から思います。本を選ぶ苦労はありますが、楽しそうに聴いてくれる子どもたちの顔をもっと見たいと思うのです。

また、家庭では久しく読み聞かせなどしていませんでした。この夏休みの親子読書では、少し長い物語を息子に読んであげました。これもまた私が小学生の頃に読んでいた本なのですが、どんな結末だったかと、私もワクワクしながら読みました。読み終えた後で、息子がもう一度読んでほしいと言った時は、私が子どもの頃に味わった感動を息子と共有できた事を、とても嬉しく思いました。

今は子どもと遊ぶ時間が少なくなりましたが、いつしよに本を読んでくれる時は、お互いにとっても有意義な時間を過ごしています。これからも、本を通じてできるだけ子どもとふれあえる時間を増やしていきたいと思えます。

宇都宮市立富士見小学校 保護者 Sさん

## 読み聞かせと大型紙芝居

私は学校支援ボランティアとして、子どもの通う学校で絵本の読み聞かせをしています。今年で三年目になります。毎週月曜日の朝の読書の時間に、仲間と交代で絵本を読んでいます。にぎやかだった教室が、絵本を読み始めると静かになって、子どもたちはじっとお話を聞いています。読み聞かせの場合、お話は耳から入ってくるので、じっくり絵を見ていられるのがよいでしょう。

「読み聞かせ」というと低学年をイメージしがちですが、六年生の教室でも行っています。六年生だつて絵本を読んでもらうのは嫌いじゃないようです。「小さい頃、お母さんに読んでもらったことを思い出す」と作文に書いた子がいました。

読み聞かせの時間、先生は教室にいません。職員室で会議中です。だから子どもたちはともりラックスしてお話を聞いています。おもしろい場面では大声で笑ったり、絵についてみながら口々に何か言ったり、時には質問してきたりします。時間が余ると「もう一冊！」と言われて、こちらが慌ててしまいます。きつと、近所のお母さんが来て読んでいる、というのがよいでしょう。聞く態度を評価されたり、感想を言わされたりしないからリラックスできる、リラックスできるからかえって積極的になれるという感じです。

昨年、図書委員が地元の民話をもとにした大型紙芝居を作ることになり、私たち読み聞かせのメンバーはお手伝いを頼まれました。地元のお年寄りに話を聞きに行き、模造紙くらいの大さきの紙十枚に絵を描くのはなかなか大変な作業でした。今度は「読む」のではなく「作る」方になったわけです。

苦労して作った紙芝居には自然と愛着がわきます。校内での発表会を成功させようと、子どもたちは一生懸命がんばりました。紙芝居を読む練習では、方言の入った会話の部分が難しかったようです。聞いている人がよくわかるように読むこと、できれば登場人物の気持ちや伝わるように読むことを目標に何度も練習しました。

発表会当日、地元のケーブルテレビが取材に来て、子どもたちは緊張気味でしたが、大きな声で上手に読むことができました。読み手の熱意が聞いている子どもたちに伝わっているのが感じられました。どの学年の子どもたちも、こんな大きな紙芝居を作ったということに驚いていたようでした。

この紙芝居を老人ホームなどで発表したところ、お年寄りの方にとっても喜んでもらえました。今年度は市の教育祭で発表することになり、新しい読み手の子どもたちが練習を始めます。私も陰ながら応援していきたいと思っております。

栃木市立千塚小学校

学校支援ボランティア Iさん



## 読書の喜び

私が読書の喜びを知ったのは、中学一年の冬休みだったと思う。兄かだれかが読んだのだろう、本箱の片隅に、一冊の古ばけた単行本を見つけた。ほこり臭い表紙には、『次郎物語』という題名が見えた。

なんとはなしに読み始めてみると、いつの間にか夢中になっている自分に気がついた。しかも、今までに味わったことのない、心がぞくぞくするような感動が突き上げてくるのを感じ、経験したことのない新鮮な感動をだれかに訴えずにはいられないような気持ちになった。

私は、年の暮れ忙しく立ち働いている母に、興奮して呼び掛けた。

「かあちゃん、この本、ものすごくおもしろいぞ……。」

「おもしろい」という言葉がその時の心境を表すにはどうも物足りないのを感じながらも、その言葉以外にはみつからなかったのである。

母は、樽の中に白菜を漬け込む手を休めず、「次郎物語かい、それは九州の小学校の校長先生だった、下村湖人という人が書いたんだよ。いい本見つけたね。」前かがみの腰を曲げたままそう言った。

私は夢中だった。『次郎物語』に没頭した。知らぬ間に陽は傾き、いつの間にか障子が赤く染められていた。

「ご飯だよー。」そう呼ぶ母の声が、何か別の世界から聞こえてくるように感じられた。

『次郎物語』はポケットブックの大きさで、第一部から第六部までにわかれていた。あいにく家にあつたのは第一部だけだ

った。私は続きがどうしても読みたかった。

母は普段、私が欲しいものがあつてねだつても、必要ないと思つたものは絶対に買つてはくれなかつた。それなのに、その時はすぐに私の願いを聞いてくれた。私は飛ぶような気持ちで本屋に走つた。

第六部を読み終えるまでの約一週間、私は『次郎物語』の世界に溶け込み、次郎と一緒に喜び、次郎と一緒に悩み、次郎と一緒に考えた。

あれから四十五年が過ぎた。数えきれない本との出会いがあつた。でも、あの時の感動は今でも新鮮なものとして心に残っている。

宇都宮市 元教員

## 二人の子どもと読み聞かせ

私は、二児の母です。上は男の子で、ことばを話し出すのが遅く、二歳になつても指さしをして「あーあー」というばかりでした。早くことばを話せるようになるにはどうすればよいかといういろいろ調べているうちに、本の読み聞かせがよいことがわかりましたので、さっそく始めました。私は働いているので、読み聞かせができるのは、夜か休日だけでしたが、時間を見つけては息子を膝の上のせ、絵本を開きました。まだ小さかつた息子は、親の膝の上のることが嬉しかつたようで、絵本に

はあまり興味を示さず、甘えられるのを楽しんでいました。私も無理に絵本を読み聞かせようとはせず、息子と二人の時間を楽しみました。息子は三歳の誕生日までには、ことばが出て、その後急速に話せるようになりました。

下は女の子で、ことばを話し出すのは早かったのですが、風邪を引きやすい子でした。三歳の時に風邪から滲出性中耳炎になってしまいました。この中耳炎は、痛くはないのですが、耳の聞こえが悪くなります。ことばが育っていく大切な時期に耳の聞こえが悪くなるのですが、その後の成長に影響しないかとずいぶん心配しました。週二回耳鼻科に通院するとともに、ことばの発達を促すために読み聞かせも毎日欠かさず行うようにしました。毎晩、二人の間に寝て、絵本を読み聞かせました。子どもたちも成長して、今度は絵本に興味を示してくれました。始めは『のんたん』のシリーズを、それから『14ひきのねずみ』シリーズを読みました。保育園で昼寝をしている二人はなかなか寝てくれませんので、毎晩五冊ぐらいは読んであげました。やがて、読む本を探すために二人を町の図書館に連れていきました。二人の好みにあった本も読んであげようと思っただけです。電車が好きだった息子は『機関車トーマス』のシリーズを選びました。娘は『森のレストラン』のようなかわいらしい動物が出てくる本を選びました。また、宇都宮市の図書館や幼児書の専門店まで連れていって本を探したこともたびたびありました。

幸い娘の耳も早く治り、その後のことばの発達には影響はなかったのですが、子どもたちは本を読んでもらう習慣が気に入ってしまい、私も子どもたちに読んであげるのが楽しかったので、寝る前の読み聞かせは息子が小学校三年生のころまで続きました。

今は子どもたちも中学生と高校生になりましたが、あの頃本を読んであげた時間がとてもなつかしくなります。本のおかげで、忙しい私が子どもたちと一緒に過ごせた貴重な時間だったと思っっています。

益子町住民

## 円地文子の源氏物語

平成十六年の四月二十日に、叔母の最期を済生会宇都宮病院のホスピスで看取りました。七十七歳の誕生日を翌日に控えての他界でした。

父の妹で子どもものいなかった叔母は、姪の私を大変かわいがってくれました。ホスピスの病室が空いたので、四月に再入院、まだらぼけ状態がはじまっていた叔母の口から、「寂聴ではなくて、円地文子の源氏を読みたいの。」と、言われたとき、驚きとともに何十年も前のことが思い出されました。一回目の入院の時は「太陽」の別冊を中心に病院で疲れない程度の読み物を、叔母に「あなたはまだこんな程度の頭の中身の」などと言われないように、私なりに司書として叔母の好みを考えながら本を選定して持っていったつもりでした。

叔母は約十五年前まで小さな小さな古本屋をひとりで切り盛りしていました。私は小学生のころ夏休みになると決まって忙しい

母にじゃまにされ、「久叔母ちゃんの所にも行けば。」と叔母のお店に行かされました。(追放だと兄たちは私のことをいじめました。)私は私で他の所に行けるといふ単純な理由だけで楽しく、着替えだけを持って父のオートバイの後ろに乗せてもらい、父は父でひとりで暮らしている妹のところに行くのがうれしかったのです。

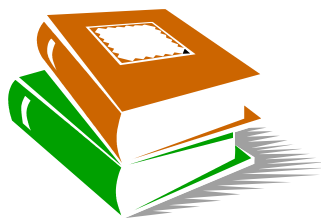
口数の少ない叔母はいつも暗いお店のすみっこで本を読んでいます。私が遊びにいつてじゃまをしても、その一日が変わることはありませんでした。時々来る客、それも小学生を相手にしての商売とはいえないような生活。けれどお金がない、などということばは叔母には無縁でした。今思えば、満ち足りた穏やかな表情をしていたのです。叔母は戦争や夫の死を経験しました。当時子どもだった私でさえ感じたことがあつたはずですが、生きてきた時代が悪かった、社会が悪いなどということばを、叔母の口から聞いたことはありませんでした。叔母は、夕顔のようになよなよとしたたよりなさが嫌いで、六条の御息所のような不気味さのほうが好きだったのです。

寂聴は、瀬戸内晴美のときに仕事場に使っていた目白台のアパートに、円地文子がある日、「源氏物語の現代語訳の本をだすための仕事場をさがしている。」と言って訪れたと、ある雑誌に書いています。寂聴は途中でそのアパートを逃げ出すことになるのですが、その理由を、「円地文子のような強烈な作家と一緒にのアパートになんぞ住めない」と言ったのです。円地文子はそのアパートに来る前には、同じく源氏物語を訳した谷崎潤一郎や平林たい子も住んでいて、刺激を受けていたはずなのに。瀬戸内晴美のときの印象が強い私はその文章を読んで笑ってしまったのですが、叔母は「そうよね。」と言ったのです。その「そうよね。」と「寂聴ではなく、円地文子の源氏が読みたい」と言った叔母のことば

が重なり合いました。円地文子の作品、『女坂』や『女面』の中には六条の御息所と共通する女の怨念、どろどろが読み取れ、寂聴までもが逃げ出してしまふような強烈な個性とエネルギーが発散されていますか？その円地のエネルギーをしっかりと受け止め、読みこなしていた叔母。女性を見る女性作家のするどさ、女性作家を読む女性のするどさ。

「なにかおもしろい物語はないかしら」と大齋院選子にたずねられた一条天皇の中宮彰子は、紫式部に相談します。式部は、「古い物語より新しい物語を作つてさしあげたら。」と答えます。中宮彰子は、それを聞いて、「式部、お前がお作り。」と命令します。叔母には内緒でしたが、私はまだ原文では通読していません。

高等学校司書



## 子どもたちに名作を

昨年、十数年間探していた本を手に入れた。イギリスの児童文学者、ジョーン・エイキンの『三人の旅人たち』である。私が小学校の国語の時間に学習した物語である。私は小学三年生の頃に学んだと思っていたが、記憶違いだった。実際には小学五年生の下級の教科書（光村図書）に掲載されていた。

大きな砂漠の真ん中にあるちっぽけな駅。その駅には三人の駅員がいるが、もう十五年間も汽車は止まっていない。三人は幸せだったが、思う存分仕事ができないことに不満があった。お金をためたそのうちの二人は、それぞれ東行き、西行きの汽車に乗り旅をする。大きな町と、山と海へ。残りの一人は、砂漠を歩いて北へ向かう。そして駅から二時間ほどの場所にオアシスを見つめる。物語は、「今では、『砂漠』と駅の名の書いてある看板には、『オアシスへは当駅下車』という新しい言葉が書きこまれているのです。」と結ばれている。

この話を初めて読んだとき、子どもながらに、「人生とは何か？ 幸せとは何か？」というようなことを学んだ気がした。美しい切り絵も印象的だった。この本をもう一度読みたいとずっと思っていたが、探す手がかりがなかった。それが、「昔学校で学んだ名作を読みたい、子どもたちに読ませたい」、「学校の副読本として活用したい」というような大人や教師の要望が光村図書に寄せられ、「光村ライブラリー」（十八巻の全集）として出版されたのである。

早速購入した私は、当時幼稚園の年長だった息子に読み聞かせてみた。息子の感想は、「よくわからない」というものだった。まだ早かったのかもしれない。しかし、この全集に入って

いる低学年用の作品、『チツクとタツク』（なんと、挿絵は安野光雅さんだった！）や『かさこ地ぞう』、『くまの子ウーフ』などは楽しそうに聞き、その後、何度も繰り返し読まれた。息子がもう少し成長した時には、『三人の旅人たち』のすばらしさも理解してくれるだろう。

自身が子ども時代に読み、感動した本を、次の世代に伝え、感動を共有することができるといことは、非常にすばらしい。子どもの中に名作を読み、情緒を育むことは、IT時代といわれる現代こそ、一番必要なことである。子どもたちに読書の楽しみを伝えたい。それが、世代を超えた「心のふれあい」なのだと思う。

益子町 Kさん

## 文学講座を通して

私はある町の文学講座で、六年間にわたって、日本の古典文学についての講読を続けている。年間六回、一か月に一回、一回九十分の講義。二十人から三十人の聴講生である。講座に参加していただいている方々の平均年齢はかなり高い。年齢などまったく感じさせない向学心と理解力の高さに心打たれる。講義に出席する実利などまったくなく、わざわざ聴きに來る人は、かなりの教養と意欲とが必要なはずである。文学を理解

する能力はもちろん、文学に対する興味と関心が持続しなければ到底、地味な私の講義など、受け続けることなど出来ないはずである。その人たちに支えられて、私は、六年間、講義を続けて来ることが出来た。一年目の『万葉集』については四年間講義し、『歎異抄』については一年間、現在（平成十六年）は、『源氏物語』について一年目の講義に入って、間もなく今年度が終了する。『葵の巻』までのハイライトシーンを読んできた。すでに来年度も『源氏物語』であることの予告をしている。『須磨』『明石』が中心になる。

講義の中で出会った方々とのつながりというものが私にとって宝物になってくるといふことの意味深さに心打たれる。というのは、私は、講師の役目をいつやめてもよかったのである。毎年依頼されるから講座を続けているとはいうものの、自分の仕事を立て込んでくる時などは、実にしんどいのである。他の人を紹介して講座を譲ってしまってもよかったのである。九十分の講義を充実させるために膨大な資料を用意し、講義の予習は手を抜けない。そもそも一か月に一回の日時を覚えていただけでも大変。仕事とのスケジュールの調整も大変。投げ出してもいい仕事だったのである。それが、わたしにとってなくてはならないものになったのは、「私にはこれしかない、これこそライフワークだ」と気づいたためであり、それ以後、積極的に自分から講座を続けようとしたのである。それは、どういう意味かという点、私にとって、講義に参加してくれる人々とのつながりが、とてつもなく大切なものであり、その中に私の居場所があったのだということである。一年目の講義から二十人近くの人々が、毎年講義に参加してきてくれたのである。その人たちに対する責任感、使命感ともいえるべきものが、その後の講義継続の原動力になったのである。自分を支え認めてくれ

る人たちのために人は働くものなのである。年賀状や、講義終了時のお礼のお手紙などが、講義を続ける責務を目覚めさせてくれた。多少しんどい講義であったにしても、精進してそれを続けるべきだと痛感したのである。それ以来、少々の困難はものの数ではなかった。戦時中の苦労話に相づちを打つ。「古代世界の糸口を教えてもらいました。」とおっしゃる今年九十歳の老先生は、六年間続けて出席していてくれる。会うたびに「おもしろいですよ」といつてくださる。ありがたくなる。この人々のために続けなければと思う。講座をやっていないければ聞けない話である。というより、講義を通じたおつきあいがあるからこそ、生きてくる話というものである。「女学生時代に戻ったようです」と『源氏物語』の講義中に何度も聞いた。講義など何の実利もないこと、しかし、人と人の心の触れあいの中に浮かび来るその味わいに後押しされ、これだけを頼りにして、人は充分にこの人生を生きていけるものと信ずるものである。講義を通じた体験から、私はそう思う。

真岡女子高等学校教諭 Kさん